

ペリー来航を捉え直す授業 ——新科目「歴史総合」の授業開発のヒントを探す——

神奈川県立荏田高等学校教諭

内田 圭亮

1. はじめに

新科目「歴史総合」は高等学校学習指導要領によれば、「世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉え、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を理解する」科目とされている。「日本史」と「世界史」を「融合」することが求められるが、どのように「日本史」と「世界史」を「融合」すればよいのか、問題関心を私は抱いた。

南塚信吾氏は『連動する世界史－19世紀世界の中の日本』（岩波書店 2018）の中で、「『日本史』と『世界史』に区別して歴史を考えない」ためには「世界の諸地域の諸『関係』に注目して考察する」必要があると述べ、国際関係史を基礎にして1840年から1910年までの「日本史」と「世界史」の「融合」を試みている。

そこで、私は、「日本史」と「世界史」を「融合」するヒントを得るために、国際関係史を基礎にして「ペリー来航」を捉え直し、授業化してみた。「ペリー来航」を取り上げる理由は、本校の生徒を対象に、「最も日本社会に影響を与えた出来事を理由とともに答えよ。」というアンケートをとった際、最も多くあがった出来事が「ペリー来航」であったからである。しかし、同時に、生徒の「ペリー来航」に関する既存の認識に誤りや不足が確認された。第一に、生徒は、「ペリー来航」に驚いた幕府の「軟弱」な外交によりアメリカに「屈従」し、日本は「開国」したと認識している点である。三谷博氏は『ペリー来航』（吉川弘文館 2003）で、「幕府は十八世紀末から約六十余年の間、仮に西洋との交際を余儀なくされたとき、どう対処すべきか、真剣に考えていた。ペ

リー来航時にはあり得べき複数の政策をすでに持っていた」と幕府の外交を高く評価している。さらに、こうした幕府がアメリカに「屈従」したという認識は、西洋への「嫌悪と警戒」、「虚勢と恐怖」の感情を生み、その後の攘夷論、明治時代の欧米に追いつこうというような日本文化の後進意識、劣等感へつながっているように思える。井上勝生氏は『日本の歴史第18巻 開国と幕末変革』（講談社 2002）の中で、「開国」について、「従来の「嫌悪と警戒」のイメージは近代の文明開化以降に生み出された」ものであり、「日本の開国物語は事実とは違う」と指摘している。第二に、生徒たちにとってアメリカのペリーが日本に来航し、いわゆる「鎖国」を終わらせたという認識は自明であるように思える点である。なぜ、イギリスでもロシアでもなくアメリカが日本に来航し開国を実現させたのかという問題意識は無い。

生徒が持つこのような「ペリー来航」への既存の認識を克服するためには、「ペリー来航」を国際関係史に基づいて、広く相互的な視野から捉え直すことが有効であると私は考えた。なお、授業は高校2年生の日本史A（2単位）で実践した。

2. 実践事例

（1）1時間目－問いを立てる「変だなあ」探し

授業の冒頭でアヘン戦争とペリー横浜上陸の絵画を黒板に貼り、「この絵に描かれている出来事に共通することは？ また、違う所はなんだろう？」と発問をした。共通点は「この後に条約を結んでいる」「アジアにヨーロッパの国がきた」、相違点は「アヘン戦争は戦争だが、ペリーとは戦争していない」「アヘン戦争はイギリス、ペリー

はアメリカ」などがあがった。次に、イギリスがオスマン帝国と締結したバルタ＝リマン条約、イギリスが清と締結した南京条約・虎門寨追加条約、アメリカが日本と締結した日米和親条約の条文と世界地図（白地図）を配布した。地図に、イギリス・ロシア・アメリカを書きこませ、オスマン帝国・清・日本の文字の近くに条約の名前をそれぞれ書かせた後（図1）、「今日の授業で見た2枚の絵画、条約の内容を比較して「変だなあ」と思ったことを探さない。」と発問をした。

授業の最後に「みんなが探した「変だなあ」を次の授業で考えよう」と予告して1時間目の授業が終わった。

（2）2時間目——「広く相互的な視野」から「ペリー来航」を捉える

2時間目の授業の冒頭で「なぜロシアやイギリスではなくて、アメリカが日本に来たのかを考えよう」と生徒に伝えた。まず、ラクスマン・

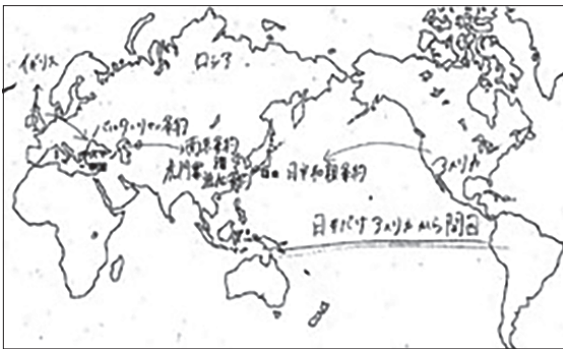


図1 【生徒が書いた地図】

【生徒から多くあがった疑問点】

日本だけイギリスじゃなくて変だなあ／ヨーロッパの国ばかり得をして変だなあ／日米和親条約は領事裁判権や関税自主権がなくて変だなあ／日米和親条約だけ貿易がなくて変だなあ

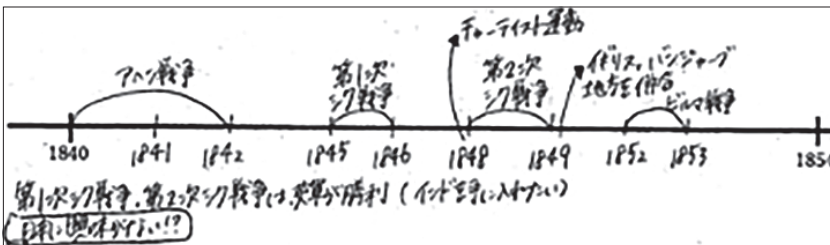


図2 【生徒が書いたイギリスの状況】

フェートン号・モリソン号を取り上げ、日本にはイギリスやロシアが接近していたことを確認した。江戸時代＝「鎖国」というイメージを持っている生徒は多いため、驚く生徒が多い。「このように、18世紀末にはアメリカ以外にもイギリスやロシアが日本には来航している。ではなぜ、アメリカが日本を開国させることに成功したのだろうか？ロシアは？イギリスは？」と発問をし、世界史の資料集の巻末にある世界史年表を配布した。

1) なぜイギリスではないのか

「これじゃ日本と開国の交渉をしている場合じゃないと思う出来事を抜き出し、整理しなさい。」と発問をして、イギリスが1840年から1854年の間、どのような状況であったかを確認した。生徒たちはイギリスがアヘン戦争、シク戦争、ビルマ戦争を行っていたこと、国内ではチャーティスト運動やジャガイモ飢饉があったことを読み取った（図2）。ある生徒が、「イギリスはアヘン戦争で隣まで来たのに、インド・ミャンマーに戻っている。日本に興味なくて、インドのほうが大切なのかも。」と発言した。この意見は、この生徒がこれまで1年生の時に世界史Aで学習したイギリスのインド経営に関する既存の知識を活用したものであろう。この意見をクラス全体で共有した。

2) なぜロシアではないのか

次にロシアを確認した。すると生徒が年表から「ロシアのプチャーチンが長崎へ来航（1853）」という記載を発見し、「ロシアは日本に来ている」と驚いていた。日本史Bを学習していない2年生はプチャーチンを知らない。そこで問題を明確にするために、「ロシアはイギリスとは違ってペリー来航の1カ月後に日本に来航している。しかし、日本を開国させたのはアメリカのペリーだ。

なぜロシアじゃなかったのかな。」と発問をした。生徒はイギリス同様、ロシアの1853年前後の歴史を調べ始め、「クリミア戦争」を発見した。そこで「クリミ

ア戦争ってどんな戦争かな。」と切り返し、クリミア戦争を確認した。3) なぜアメリカだったのか

最後にアメリカを確認した。年表には、オレゴンの編入、米墨戦争とカリフォルニアの編入などが書かれていた。すると、ある生徒が「アメリカは暇だったってことね」と発言をした。そこで、「暇だったとしてもなぜアメリカはわざわざ遠く離れた日本に開国を要求したのだろう。」と発問を切り返し、2時間目が終了した。

(3) 3時間目——アメリカの真の目的は？

3時間目のテーマは最も生徒から多くあがった「日米和親条約だけ貿易がなくて変だなあ」にすることを生徒に伝えた。

1) 日米和親条約締結の交渉過程を再現する

まず、生徒たちと日米和親条約の交渉過程を再現した。「ペリーは揚げ足を取られている」「幕府の林さんは強気に感じた」などの感想を生徒は持ったようである。その後、「①と②どちらがアメリカにとってより大切な要求だろう」と発問すると多くの生徒が②に手を挙げた。すると、ある生徒が「もし、②が大切なら、③で、「もし②の内容さえ日本が納得しないのであれば」とペリーは言うのでは？」と発言した。他の生徒も「本当にアメリカが貿易を求めているなら、イギリスのように戦争をして実現させたのではないかな。だけど日本と戦争をしていないから、やはり貿易はおまけだったのでは」と言った。この後もペリーに随行した画家ハイネの日記を使用し、日米の軍事力の比較を行うなど生徒たちの間で討論

【日米和親条約の交渉】

井上勝生『シリーズ日本近現代史① 幕末・維新』（岩波新書 2006）より作成



ペリー

- ① 1837年におきたモリソン号事件には驚愕し、アメリカ政府としては遺憾である。漂流船員に対する人道的な待遇を日本には求める。
- ② 貿易はお互いの「国益」になるものであって、決して「不利益」にはならない、だから日米間で通商関係を結ぼう。
- ③ アメリカは米墨戦争でメキシコの首都を占領した。もし①の内容さえ日本が約束しないのであれば…

- ① 1 日本の政治は人命を重んずることに關してはどの国よりも優れている。これまでも漂流民については、長崎に護送し、オランダ船を利用して、各国へ帰してきた。それに、モリソン号事件はもう17年も前の事件である。ここで取り上げるのには時が経ちすぎている。
- ② 確かに、貿易は両国の利益となるでしょう。しかし、日本は自国の産物で十分である。そもそも、アメリカ側の第1の主張は「漂流民の保護」「船々の救助」ではないのか？「貿易」は「利益の論」であって、「人命」には関わらない。無理にでも実現しなければならないことではない。
- ③ 「人命を重んじる」という立場をアメリカがとるならば、この交渉がうまくいかなくても戦争をして、死者を出すのはおかしいではないか。



林復斎

が続けられたが、「アメリカは日本との貿易は「おまけ」だった」という生徒の意見が支持を得て、討論は決着した。

2) アメリカの本当の目的は何か

討論の後、「貿易が「おまけ」だとしたらアメリカの真の目的はなんだろう」と発問し、アメリカ議会海軍委員会の委員長キングの提唱を生徒に示した。キングの提唱に出てくる地名を白地図に書きこみ、大圏航路を描いてみた(図3)。

3) 幕府はペリーに屈したのか？

条約交渉を再現すると「林全権が勝ったか？ペ

【アメリカ議会海軍委員会委員長キングの提唱】 三谷博『ペリー来航』吉川弘文館 2003より作成

北太平洋の大圏航路、すなわちパナマからサンフランシスコを経てアリューシャン列島・千島・日本列島の沖を通して上海に至るのが最短距離だ。それは、ニューヨークから1万950マイルで45日を要する。喜望峰・インド洋経由では1万8000マイル～2万マイルであり、80日を要する。北太平洋を通る大圏ルートは、ニューヨークと上海間の航海日数を大幅に削減できる。また、イギリスのロンドンから清国のカントンまでの航海日数は65日なので、清国でのイギリスとの競争にも、有利になるだろう。



図3 【生徒が書いた大圏航路】

リーが勝ったのか？」ということに焦点が当てられたクラスもあった。生徒たちは林全権の「見事」な外交に驚いたのかもしれない。しかし、アメリカの真の目的が、対清貿易拡大を目指す大圏航路の確保、その航路上にある日本の寄港地化であることに気づいた生徒たちは、日米和親条約に通商規定がないのは「林をはじめとした幕府外交官の外交交渉力によるもの」なのか、「アメリカが対日貿易よりも大圏航路の確保、日本の寄港地化を優先したから」なのかという板ばさみ状態になったようである。そこで、「勝ったのは、ペリーか林全権か？」という小レポートを課した。

【生徒の意見】

- ・ペリーの圧力から逃げることもなく、戦争にもならず貿易もせずすんだのは林全権の巧みな外交技術によると思います。
- ・アメリカの真の目的は、大圏航路で上海に行くために、日本を開国し、物資の供与をして欲しかった。日米和親条約でその内容を日本が認めたので、ペリーの勝ちだ。
- ・引き分け！日本が一番阻止したい貿易の規定をなくすことはできたし、林さんもペリーに負けず頑張った。アメリカからすれば、貿易が一番の目的ではなく、大圏航路の確保、日本で物資をもらうことだったので、それを達成している。どっちも目標を達成していて引き分け。

(4) 宿題——まとめレポートを書く

最後に授業のまとめとして、「なぜ、アメリカが日本を「開国」させたのか」というレポートを生徒に宿題で課した。

【生徒のレポート】

イギリスは1840年頃から1853年頃までの約11年間でアヘン戦争・第一次シク戦争・第二次シク戦争・イギリス＝ビルマ戦争・クリミア戦争の5回の戦争を行っていて、日本を開国させる余裕はな

かったと考えられる。また、インドやインドの隣のミャンマーを攻撃していることから、日本には興味がなかったとも考えられる。ロシアは1853年にプチャーチンが長崎に来たが、その年からクリミア戦争をしているため、日本と条約を結ぶのには至らなかった。アメリカは1842年～1853年まで戦争があまりなく、アジアに進出する余裕があった。またカリフォルニアでの金鉱の発見、ゴールドラッシュなどで、国の活力も高い状態であった。アメリカは清と貿易をするための大圏航路の中継地点として日本を開国させ、石炭や食料を供給してもらう必要があった。以上の3つの理由から、イギリスやロシアではなく、アメリカが日本を開国させることができた。

3. おわりに

本実践は、国際関係史を基礎とする歴史の見方を応用し、生徒の「ペリー来航」に関する既存の認識をより一層成長させることをねらったものである。結果として、「歴史総合」で求められる、歴史を「世界とその中の日本を広く相互的な視野から」捉えることにつながり、「歴史総合」の授業開発のヒントを探ることにもなった。

生徒たちは「ペリー来航」をアメリカと日本の二国間の歴史と捉えているものが多い。もしかしたら、日本の歴史「日本史」と捉えているかもしれない。これは、「ペリー来航」に関わらず、他の歴史にも当てはまるのではないかと私は予想している。小谷汪之氏は「いかなる社会、民族、国家の歴史にしろ、けっして孤立してもっぱら内在的に発展してきたわけではなく、他の社会、民族、国家とのあいだにさまざまな関係を取り結び、それによってさまざまな作用を受けながら発展してきた。」という。このような小谷氏のいう視点が希薄なのである。それだけに、「世界とその中の日本を広く相互的な視野から」歴史を捉える「歴史総合」は、生徒の歴史認識をさらに成長させることができるのではないかと私は期待をしている。

もちろん、この授業を受けた全ての生徒が「世界とその中の日本を広く相互的な視野から」歴史を捉えることを身に付けたわけでもない。今後とも、教材研究に励み、日々努力していきたい。